

死線を越えて

島根県 右田 武

終戦

中支の最前線、宜昌、荊門附近にあった我が茅三十九師団は、酷暑と闘いながら三百里の行軍、さらに汽車輪送を経て、目的地満州四平街に着いたのは昭和二十年七月二十三日だった。王道落土とまでうたわれた満州だけに、戦争は酷となっている今日、町の様子は実に平和なものであった。四平街に着いたものの、我々の入る兵舎はなく、町の中央にある公園に天幕を張っての露営生活を余儀なくされた。

数日を経て、ソ連との国交状況悪化し、北滿方面にソ連機が頻繁に横行し、ソ連軍の進攻を予期して、関東軍、日本人市民の行動は極めて深刻な状況と化した。

八月九日、ラジオは対ソ開戦を報じ、新京停車場付近はいち早く爆撃された。東西北よりのソ連軍の侵入のため、

前線にあった邦人は全部南滿州に引き上げの命令が下り、南下する列車は、引き上げの邦人を満載し、駅頭は騒然たる状況と化してしまった。

その後、我々は四平街西方鄭家屯方面より進撃して来るソ連軍防御のため、八面城に前進した。中隊は八面城にあり、我々小隊はさらに三口江に前進し、鉄橋を爆破し、この線で敵を阻止する任務を持っていた。しかし交戦せずして八月十四日夕刻連隊本部より、「停戦の御詔勅が下った。部隊は直ちに四平街北方楊木林台上に引き上げよ」との報に接した。我々はお互いに顔を見合わせ、何かデマではないかと耳を疑いながら楊木林台上に帰った。しかしそれは真実であり、敗戦をまともに感じた我々は、こみあげてくる涙をいかんともすることができなかつた。軍旗は焼き、兵器は全部ソ連軍に引き揚げられ、我々は完全にソ連軍の監視のもとに行動することとなった。

捕虜

九月十三日、我々は山田正吉大佐を長とする五百十二作業大隊として編成され、「二か月の予定をもって鉄道

修理に従事し、内地に帰還す」との命令のもとに行動を開始した。黒河で黒竜江を渡河し、ブラゴエシチエンスクでソ連領入り、一路西へ西へと進行した。出発して半月余り十月三日、チタ市西方三百キロ、ジップヘーゲンの駅でおろされた。駅には伐採された大きな材木が山積みされていた。我々はそこよりソ連軍に引率され、六キロ山の中にある柵で張り巡らされた収容所に入れられた。収容所といっても家はなく、牛馬のごとく大きな柵の中で、自分たちの携行した天幕を張っての露営である。二日余り食事もできず、ペコペコの腹をかかえて目的地に着き、ようやく食にありついた。十月初めというのに夜の寒さは格別である。

防寒被服にくるまって一夜を明かす。

伐採

内地帰還の夢も消え去り、ソ連軍の計画によって、厳重な監視のもとに重作業が課せられた。我々はこの地において木材の伐採をするために送られて来たのである。

千五百人のうち半数は、我々は住宅建設に、他は伐採作業に当てられた。今まで見たこともないピラー（鋸）、タ

ポール（斧）が渡された。そして一度も斧を入れたことがないであろう大森林の中に入れられた。

樹木は主として赤松、落葉松、白樺で、この大木を伐採して駅まで出すのが我々の任務である。元来この伐採作業は、ソ連内においても最も苛重な労働としていわれ、主として囚人や定期的な労働大隊が当てられた仕事である。作業はすべてソ連どおりのノルマ（作業基準定量）によって行われた。ノルマ一日六立方メートル、二人一組で十二立方メートル積まなければならない。用材は一人七・五立方メートル、朝未明に起きて夜暮れるまで働いてもなれない我々にはなかなかノルマを果たすことはできなかった。

十一月となり、シベリアは最早雪の原である。零下二十度となり、三十度となり、防寒被服をつけても手足が凍え、斧さえ握り締めるのが困難であった。吹く息も白く凍り、鼻髪につらが下がり、小便まで凍ってきた。しかしいくら寒くても作業の休みはなかった。

殺人的な寒さと、我々を襲った最大の悩みは、殺人的な食糧不足であった。コーリヤンや粟の雑炊や、三百グ

ラムの黒パンの小切れで、空腹と寒さで満州で肥えていた身体も一日一日やせて、ほとんどの者が栄養失調にかかった。肺病患者が激増し骨と皮となり、加えてシラミが多発して精神的な負担と重なり、枯れ木のごとく多くの戦友が倒れていった。

戦友の死

十二月、一月となり、シベリアの寒さは極度に増してきた。零下四十度、五十度と下がり、防寒被服をつけてもしびれで身体の自由され失う寒さである。酷寒と飢餓で戦友がバタバタ倒れていった。作業場で凍死する者、伐採の木の下敷きとなる者、また栄養失調で倒れる者、一日に五人六人、多い日には十人も死んでいった。

夜遅く作業から帰り、一緒に食事をとっていると、そばにいた戦友がぐったり倒れた。「どうしたか」と起こしてみると、呼吸もなく死んでいたこともあり、一緒に寝ていた戦友が起床になっても起きない。起こしてみるに死んでいたこともあった。これらの死亡者は全部ソ連の命令で毎日車力に乗せて積み重ね、山に引いて火葬にし埋葬した。翌年四月まで我が収容所で三百六十五人の

戦友がこの地で憤死したのである。

戦争も終末を告げ、内地帰還を夢見、父母、兄弟、妻子の安否を気遣って、日ごとに郷里の話に花を咲かしていた。しかし彼らがついに内地の土を踏むことができず、永遠にシベリアの土と化したことを思うとき、やるせない怒りを感じるとともに、亡き戦友の冥福を心から祈る次第である。

民主運動

酷寒のシベリアも五月になってだんだんと暖かくなって、氷も解け始めた。一メートル以上も凍っていた川も流水と化し、野辺の草木も芽立ち、ようやく春らしい気候となってきた。氷の下に押さえられた草木の芽立ちとともに、疲労しきった我々も心身ともによりやく生氣を取り戻してきた。

ソ連側は冬中、あまりにも犠牲者の続出と栄養失調患者の多発で捨ておくことができず、栄養失調患者を一か所の兵舎に収容し、軽作業に当て養生させてくれた。と同時に彼らの真の目的である、共産主義の思想教育がまったのである。

まずソ連側は、捕虜の中から三人の指導者を選び、友の会なるものを組織させた。そして友の会は軍隊制の打破と共産主義の指導宣伝におかれたのである。そのころよりハバロフスクで発行された日本新聞が送られてきた。隔日に発行され、四ページの新聞である。内容は世界の共産勢力の状況の宣伝、日本の現状を攻撃、ソ連の建設的發展を褒めたたえ、民主運動の進め方等、繰り返し載せられていた。友の会はこれを教材として、我々を指導宣伝していたのである。ソ連側は我々の思想教育者として、シコンジン政治部長、コシターノフ政治部員、コシチン日本語通訳が当てられ、日夜共産主義思想の教育に努めていた。翌年冬より種々のパンフレット、ソ連共産党史等が配布され、夜間教室等もあり、運動は次第に活気を呈してきた。友の会は民主グループと改名し、会員も百余人となり、翌年春より楽劇団等も組織され、本格的なアジプロが開始された。

民主グループはさらに民主同盟と改名され、二十二年春よりチタ地区において講習会が開催され、各収容所より数名派遣されていた。二十三年春帰還態勢の確立のた

め、民主同盟は反ファシスト委員会と改称し、委員七人選挙によって選抜され、大隊の運営、作業、思想教育等一切の権力を持たされるに至り、その態勢は帰還まで続き、思想的運動は日々度を加え、ナホトカ湾上まで続いた。

帰国

酷寒、過重労働、飢餓、思想教育、二度と思い出したくない悪夢の三年も過ぎ、ついに夢見た帰国の日が来た。我々は出張伐採で山にいたとき、帰宅の命を聞き、子供のように喜んで宿舎に帰った。器材返納帰国準備へと忙しい一週間も過ぎ、二十三年十月二日、我々五二二大隊は、一応ツリッタツセズモイにある五二〇大隊の位置に集結し、帰還編成を終え、十月五日夜刻同地を帰還列車で出発した。列車は貨車中で中を二段に仕切ってあって、真ん中に暖炉が設置してあった。車上一週間でナホトカ収容所に到着し、四個分所のそれぞれの帰還手続きをすまし、十月十九日収容所を出発、四キロ余りある港まで徒歩で出た。山越しにある港、そこは十年ぶりに見る懐かしい日本海である。港には既に輸送船信濃丸

が停泊している。我々はこの船で日本に帰ることができ
るのだ。感涙にむせびながら乗船を待った。

米軍、ソ軍の引き継ぎを終えていよいよ乗船である。

一步一步棧橋を登るうれしさ、一生忘れ得ぬ感激の思い
出である。十月二十一日夕刻、信濃丸は懐かしい舞鶴港
に着いた。青々とした日本の山々、畑、田、敗戦といえ
ども代わらぬ祖国、十年ぶりに見る日本の姿である。復
員局の方々の出迎えて、小舟で棧橋に上陸した。「お帰
りなさい。ご苦勞様でした」と出迎えの人々の声の中
に、我々は舞鶴援護局の平収容寮に入った。消毒、入
浴、新しい被服の支給を受け、久しぶりに畳の上で横に
なった。スピーカーが報じる、再会の歌、うれしさと喜
びで一夜を過ごし、すべての引き揚げ業務を終えて、十
月二十四日特別列車で郷里に向かった。

忘れられない抑留

栃木県 林 英治

奉天で敗戦の日を迎え、ソ連軍の軍門に降り、北陵に
集結させられた私たちは、貨車で粗食に耐え、二か月余
りも費やし、昭和二十年十一月にトルキスタン州ハンタ
ギー村着。廃墟のような鉛鉱山の地で収容所生活が始
まった。

三千平方メートルくらいの敷地にバラックの棚組みが
なされ、四隅に歩哨が交替で見張る望楼があり、作業に
行くときは五列縦隊の前後に歩哨つきで往復監視され
る。まさに虜囚の身の悲しさを思うにつけ、ぞっとする
心境です。十一月ということで、見渡す山に緑はなく、
岩石の山肌を見ると寒さの厳しさが、一段と身を刺し
た。

鉛鉱山の作業生活が始まり、かつての戦時体制を思わ
せるような三交替労働にしていたが、食糧が少なく、しか